

京都寺院障壁画彩色の現状

中 里 寿 克

昭和 46, 47, 48 の 3ヶ年に京都における寺院 7 個所の桃山時代の代表的な障壁画について、彩色の現状とその技法を調査した結果を報告するが、限られた日数の間に限られた個所を調査しているので、これをもって現在における桃山時代の障壁画の姿を把握したことはならないが、ある程度の目安は得る事が出来たと考えている。ここでは各寺院の障壁画について調査した結果のみを述べ、現状に対する批判や考察は行なわない事とする。

i) 天 球 院

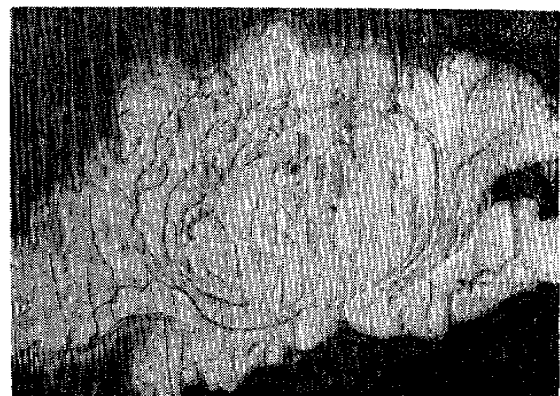
昭和 27 年に剝落止めが行なわれ、昭和 47 年本堂解体修理に伴う貼りかえが岡氏により行なわれている。

「鉄仙朝顔」図においては柴垣をまず淡墨で下書きし、その上に丹具による盛上げを行い、全体に膠あるいはふのりをひいて、やや小判色の金箔を貼る。盛上げ部分は所々金箔が剝落し、盛上げも畳に近い部分で剝落が目立つ。その他の顔料——緑青、胡粉盛上げ等にはほとんど剝落は見られず良好である。ただ緑青部分は焼けによる本紙の劣化が、破損や顔料の剝落をひき起す所が若干見られる。鉄仙、菊、百合の葉では所々白緑と思われる所があり、ここは例外的な細かい網目状の断文が全面に入る現象が窺える（図—1）。仏間にある八咫鳥の水墨画には表面に白化現象が見られた。

板絵では西側表にある「ばたん図」において胡粉盛上げ部分が木目（秋材）上で剝落するのが見られ現状でも浮上って危険な個所がある（図—2）。一年後の調査でごく一部に剝落があった事が写真で認められた。東面表の「冬木鷹」図の彩色は、彩色部分が板面の風化で盛上るのが見られるが、良く観察すると木目の風化部分にも彩色が置かれており、現在の彩色は後世の補筆ではないかとの疑問をいだかせた。ここでは雪を表わした胡粉地の部分は二層みられ、上層はややくすんだ灰色をしている。



図—1 天球院 白緑顔料の網目断文



図—2 天球院 板絵の木目上の剝離

ii) 二 条 城

ここは昭和 18 年頃剝落止めが行なわれたと云われ、近年にも部分的な剝落止めが施こされ

ている。

膨大な数の襖絵があるので彩色の状態を単純に述べる事は困難だが、全体的に見て今日までにかなり被害を受けている事はたしかで、調査した時点でも危険な所がなくもなかったし、保存処置自体に多少問題がある所なども目についた。

まず黒書院「ぼたんの間」において、ぼたんの胡粉厚塗り部分に層状剝離が目立ったが、この部分は剝落止めにかかなり苦心したらしく、許容以上の樹脂光沢が認められている(図-3)。「桜図」などの胡粉盛上げ彩色は、剝落止めの際の彩色層の移動がひどく目立ち、見苦しい所が多い。又所々の襖絵の彩色部分、金箔部分等に噴出状のめくれが見られるが、これは彩色層表面に形成した剝落止めの合成樹脂被膜の収縮によるものと考えてよい(図-4)。

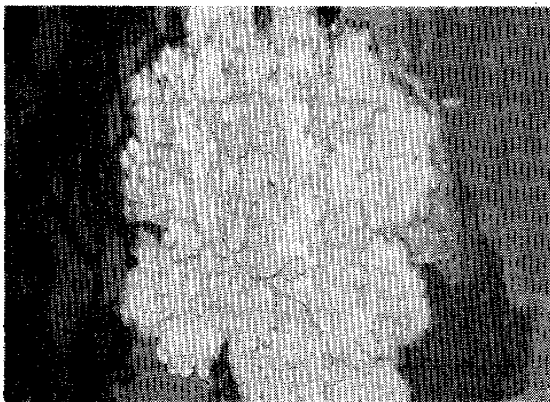


図-3 二条城 ぼたん図の樹脂光沢



図-4 二条城 彩色部分の噴出状剝離

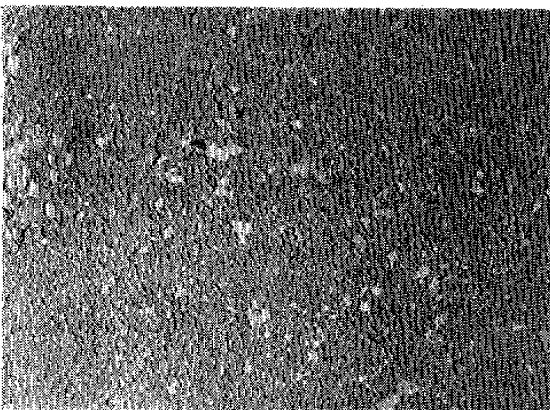


図-5 二条城 緑青地塗りの細断文

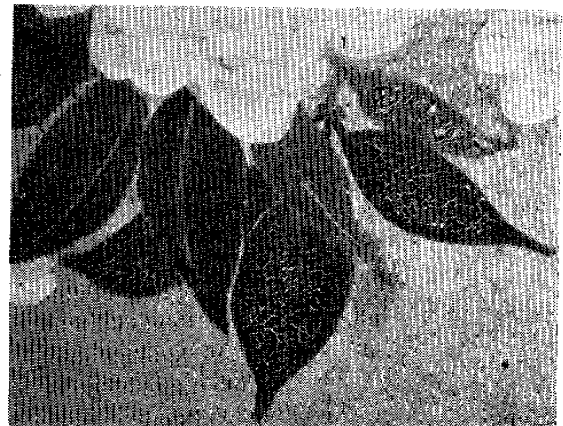


図-6 二条城 代赭色部分の網目断文

「ぼたんの間」では緑青地塗り部分に網目状断文を生じる所があり(図-5)、又「桜図」などの若葉の顔料(袋赭色)にのみ同じく細かい網目状断文を見るが、これは彩色施工によるものであろう(図-6)。「ぼたんの間」西壁には緑青焼けと思われる本紙の破れが見られ(図-7)、「虎の間」の一部には金箔部に本紙よりの破れが一面に見られる所がある。

板絵では、顔料の焼けによる汚損が見られ、「鳩図」、「ぼたん図」に一部認められる。黒書院えの廊下にある二枚はその典型的な例で、板戸の前で暖をとった事があり、その為であろうと云われるが全面黒褐色に汚染し、顔料層は煮え立つ様にふくれて、当初の状態を想像出来な



図一七 二条城 緑青部分の本紙の破れ



図一八 智積院 胡粉層の層状剥離

いほどになっている。しかし一部には板戸の盛上げ彩色で極めて保存のよいものもあり、ぼたんの間の「花盛籠図」はその例外の一つである。これは施工、あるいは技法の良悪によるものであろうが、柴垣の盛上げ法などは天球院に見るものと同じ技法の様に見える。

iii) 智 積 院

昭和22年に剝落止めが行なわれているが、現在の彩色の状態は一部を除き全体的に見てそれほど危険はないと考えられる。

「松に秋草」図においては、ぼたんの胡粉による彩色部に層状剝離を起し、への字に起上っ



図一九 智積院 顔料層のふくらみ



図一〇 智積院 貼絵の部分

ている所が二三ヶ所認められた(図一8)。おそらく本紙の収縮によるものであろう。「松に黄蜀葵図」では水あるいは薄い合成樹脂液等の何物かが流れた跡にそって顔料層が小さなふくら

みをもって剝離している所が見られた(図-9)。その他僅かの剝離はあるが画面の大きなわりに保存はよい。「楓」図では紅葉の彩色に一部小さな層状剝離が見られ、朱色部では小さな網目断文を生じ、かなり剝落している所がある。白っぽく変色した色の葉が多くあるが丹の変色によるものと考えられる。「桜」図においては胡粉盛上げの桜花に合成樹脂膜と思われるものが、彩色の凹部にめくれ上っており目立つ。これはとくに胡粉層に影響あるものとは考えられない。46年に調査の際「楓」図の一部にカビらしいものが金箔上に一面に見られる部分があったが、48年に調査の折は見当らなかった注。

描法は、金箔の置方を見ると「桜」図、「楓」図において紅葉や桜花の小さな部分で箔を抜



図-11 南禅寺 朱色顔料の細断文と剝落



図-12 南禅寺 虎図胡粉層の剝離

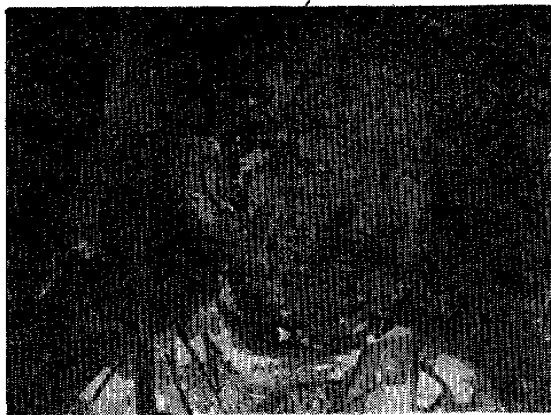


図-13 西本願寺 顔料の不規則な剝落

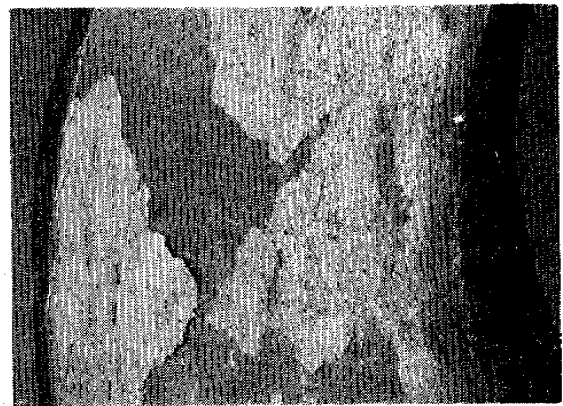


図-14 西本願寺 金箔上胡粉の剝離

いており太い枝や若葉等は金箔上に描かれる。「楓」図では群青の水流を一部金箔上に塗っている所であるが、特に剝落がひどい事はない。桜花の盛上げはまず薄く盛上げた上に淡墨で花辨を描き起しその内を丁寧にほり塗りとして仕上げている。「松に黄蜀葵」図では蔦葉等を貼絵とすることが見られるが当初からのものかどうか知らない(図-10)。

iv) 南 禅 寺

昭和 22 年に剝落止めが行なわれている。

注：これについては保存科学部、新井英夫技官が菌を採取し調査したが、古い菌ですでに死滅しており現在は影響ないとの教示を受けた。

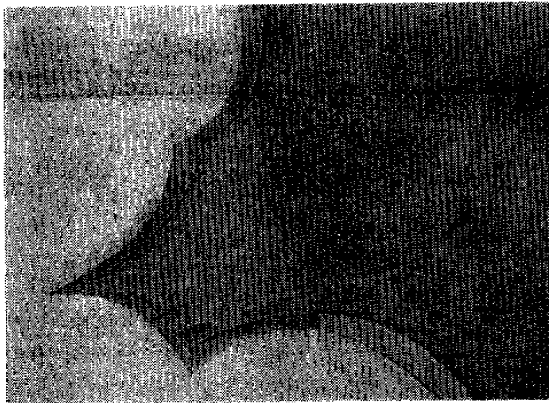
襖絵の彩色層は一般に顔料層が薄い所が多く、剝落よりも磨滅による破損により絵がぼけている所が多い様に思われる。大方丈の「麝香の間」で見ると、ぼたんの緑青で画いた葉の部分に剝落が多く、ぼたんの紅色は細断文が見られるのみで、比較的保存よい。又「仙人高士」の図の人物の朱の衣文には網目状の細断が入り剝落する（図—11）。

「虎図」の一部には黄土系の顔料の上に胡粉をのせる部分があるが、ここにのみ小さなふくらみが多発しており、一部層状剝離、剝落を生じている（図—12）。つつじ花にも胡粉部分に層状剝離がみられる。朱色にも網目状の断文がみられる。

V) 西本願寺

昭和 21 年に剝落止めが行なわれ、近年にその部分的な施工が再びなされている。

最も規模の大きい「対面所」を中心に調査したが、上段の間の彩色が全体に保存が悪く剝落がひどかった。これらの剝落にはきまった傾向がみられず、まったく不規則に亀甲文状の剝落が生じており、非常に見苦しくなっている。例えば顔に塗られた胡粉が、剝落していない所や、網目状の剝落を示す所や、ほとんど剝落している所が並んでいる。金箔盛上げ部分も網目状断



図—15 西本願寺 本紙を雲形に切り群青を塗る



図—16 西本願寺 板絵の顔料による汚損

文の見られる所とそうでない所とがあり、これらの現象が保存処置によるものか施工によるものかの判断は難かしい（図—13）。金箔部は下塗に胡粉の隅取りのある部分に剝落が多い。緑青の焼けによる本紙の破れは所々に認められる。西面の「鶴図」では金箔上に胡粉で描く為に磨滅して薄くなる所や層状剝離を生じている所がみられる（図—14）。土坡や雲の部分は本紙を切抜いて群青を塗っている（図—15）。「東狭間」では上段花頭窓下の部分で本紙が剝離して波うっており、彩色が危険であった。

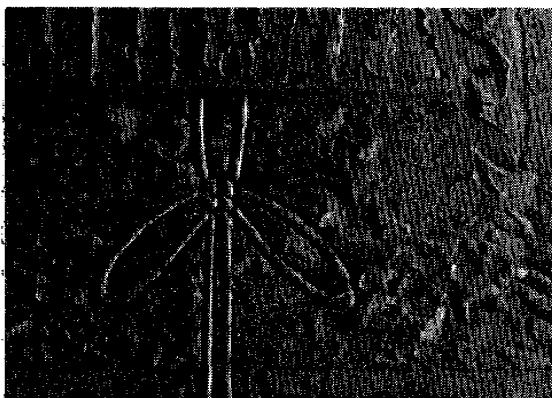
板絵は「岩上猿図」が全体に彩色の焼けによるひどい汚損を生じており、板面もかなり犯されている（図—16）。「ぼたん図」では胡粉の木目上の剝落が著るしく、「舞楽太鼓図」では緑青部分にひどい表層剝離を示している（図—17）。「虎の間」の屋外に面した「竹図」は、緑青で描かれるが緑青部分以外の板面が著るしく風化して凹み、墨線の部分も風化して「竹図」が盛上った様になっている。緑青はかなり保存よいが、風化防止の作用があつたのであろう。

飛雲閣では二階の「歌仙図」で、顔部の胡粉の剝離が一部見られた。

vi) 大覚寺

昭和 24 年に剝落止めが行なわれる。

「ぼたん図」及「柳松図」を見ると緑青塗りの部分はほぼ健全だが、それ以外の彩色に剝落



図一17 西本願寺 板絵緑青部分の剝落

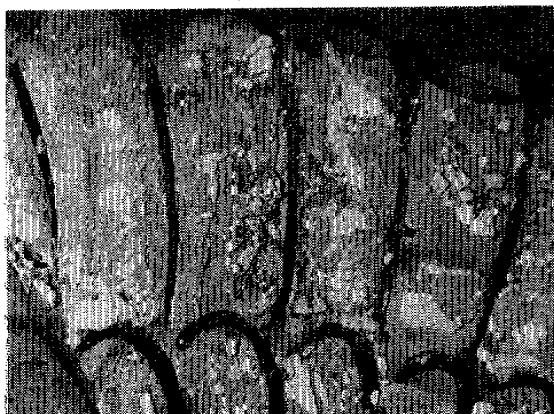


図一18 大覚寺 金箔上の部分的剝落

が多い様に思われた。

「ぼたん図」においては花の胡粉部分にひどい剝落があった事が認められるが、現状ではひどい剝落は生じていない様に思われた。ただ胡粉隅取りの金箔部分に噴出状の金箔のめくれが見られた(図一18)。「柳松図」では松幹にかなり剝落があった事が知られ、又鶴も胡粉塗り部分の剝落がひどかった跡が見られた。ここでは剝落止めの際の彩色層の移動がかなり目立つ(図一19)。飛鶴の黒羽根の部分は補色がなされるが、当初の彩色層が再びめくれ上って来て、かなり危険な状態になっている(図一20)。松樹上の巢の部分も彩色層のめくれ上りが生じている(図一21)。梅花の部分にも胡粉上に薄い膜がめくれるのが一部認められるが、合成樹脂膜と思われる。

障子腰板絵では一般に保存よいが、胡粉盛上げ部分にすでにひどい剝落があったものがある。



図一19 大覚寺 飛鶴の胡粉層の移動



図一20 大覚寺 飛鶴の黒羽根の剝離

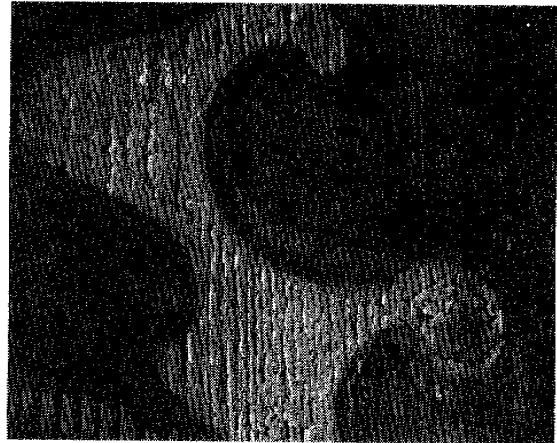
vii) 養 源 院

昭和 22 年に剝落止めが行なわれる。

ここでは宗達筆と云われる板絵が有名だが、その内の一枚、本堂東面の「象図」の一枚に著しい彩色の焼けによる汚損が見られ、それが木目にそって流れて縦じまをつくっているが、一部は顔料層を犯して煮え立つ様にふくらんでいる部分がある。ごく一部に胡粉の表層剝離が生じるが全体によく保存される。この裏面に金泥塗りとした獅子図があるが、ここは保存よい。



図—21 大覚寺 松上鶴巢部分の彩色の剝離



図—22 養源院 波文図の細断文

西面「波文図」では胡粉の木目上の剝落が見られる部分があるが、網目状断文の入る所も見られる（図—22）。一部には木やせにより木目が胡粉塗り上に表われる所なども見られる（図—23）。その他金箔貼りの獅子図があるが異状はほとんどない。以上の絵は淡墨のくくり緑の部分がむしろ風化してうすくなっている。

「松図」襖絵はほとんど異状ない。「ぼたんの間」では未処理の為胡粉などが浮上っている所が見られた。

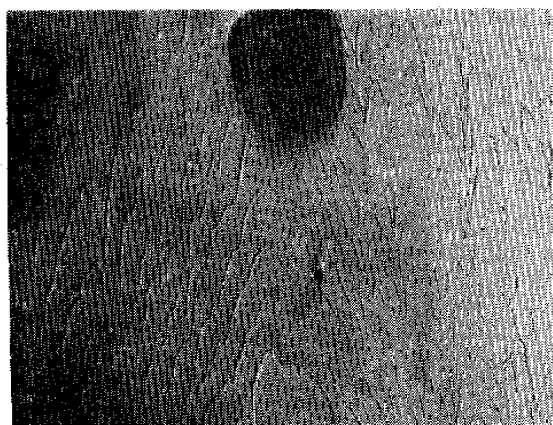
viii) ま と め

京都における障壁画は、大方昭和 28 年頃までに主要のものは剝落止めが完了したと云われるが、その内のいくつかは近年になって再び保存処置が行なわれている。これらの保存処置は今回調査した所では必ずしも成功して具合よく行っているとは云えないものがあり、その処置法に疑問を持たせるものがある。しかし終戦後の苦しい時代に保存処置が実施された事実は非常に大きな意義があると云わなければならないであろう。その処置の為に現在多少剝離やめくれが生じたとしても戦後直に保存処置が講じられなかったら、今日まで現在の様な姿で遺されはしなかった事を、画面を見つめる事によって十分に理解出来るからである。

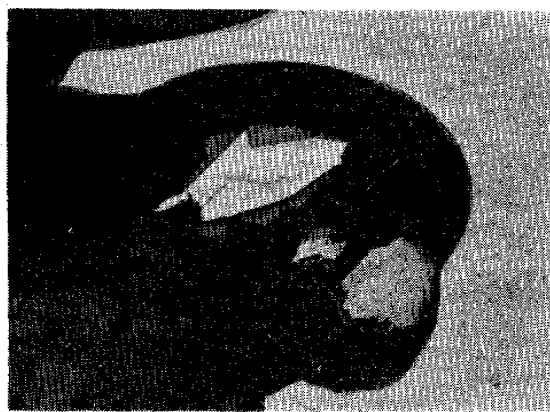
7 個所の障壁画を調査した結果では、筆者も技法も、あるいは環境さえも異なる所におかれたものが、彩色の剝離・剝落に多少共通した現象を窺う事が出来るのは興味深い事である。これらをまとめてみると、まず胡粉を見ると、これは例外なく層状剝離をおこしており、板絵でも金箔紙の上でも破損が大きい。盛上げ胡粉の場合も下から浮上ってくる事が多い様である。上に金箔を貼った場合なども、金箔がほとんど剝落している。緑青は一般的に見て保存がよい。剝離する部分は本紙が劣化した事による場合が多い。ただ例外もなくはなく南禅寺大方丈では、むしろ緑青部分に剝落が多いのは留意すべきである。板絵では屋外に面してさえ保存がよく、西本願寺に見られたものは、風化されずに残り、盛上る様になっていた。ただ白緑になると多少異なり、あまり使用例はないが天球院の朝顔図の葉等では細かい断文が入るのが見られ、二条城では岱赭色に網目状断文が見られた。群青はやはりあまり用いられないが、智積院楓図などで見ると緑青と同じ保存状態にある。南禅寺に見られるものは薄く磨滅した状態になっていた。朱は細かい網目状断文を生じているものが多いが、これは朱自身に原因するのではなく剝落止めの際、合成樹脂の膜が表面に出来る為の様に思われる。ひどくなるとめくれ上って噴出状の剝離を示してくる。黄土岱赭などの顔料もやはり一般に保存が良くなく大覚寺の柳松図の松幹などはひどい剝離を示していた。ただ養源院松図では松幹はほとんど痛んでいない。

板絵においては所謂顔料の焼けによる汚損を示すものが多かった。この汚損について最近問題になったのは清水寺蔵末吉船絵馬においてであったが^註、板絵を調査して同じ様な例が随所に見当され、今後この汚損は大きな問題となるであろう。この発生原因については、今回の調査でも明確にはなっていない。養源院の様に日照りなどの様に外的条件があてはまる所があるが、他は必ずしも日当りは良くない。やはり彩色のメカニズムの内に原因するものとしか考えられない。知見によれば、この汚損は進行性のものであり、やがては顔料層と素地を除々に犯して行く様に思われる。板絵上の彩色で特に胡粉は非常に不安定で木目（秋材）の上で剝落が生ずる例が多い。その点緑青は胡粉の様な剝落状態は示していない様である。ただ西本願寺の舞楽太鼓図で見られた緑青は表面剝落を示していた。

保存処置された結果でみると、胡粉は例外なくその施工に苦慮しており、合成樹脂液が濃い目になって光沢を生じるものになっている。盛上げ胡粉上ではこれが剝離している所（智積院桜図）があり、又胡粉層が移動している所も多い。先に述べた様に朱や白緑等の粒子の細かい顔料の部分は例外なく保存処置の欠陥が現われている。これは粒子が細かい為に合成樹脂の浸透が悪く表面にたまってしまふ為であろう。胡粉、朱、黄土などは特に用心深く保存処置を行う必要がある。



図—23 養源院 波文図胡粉上の木目状のヤセ目



図—24 大樹寺 朱色の噴出状めくれ

最近調査した岡崎の大樹寺襖絵は昭和32年頃に剝落止めが行なわれているが、朱のぼたんの一部には新たな噴出状のめくれが生じていて、合成樹脂光沢が認められた。これは剝落止めが結果的に剝落助長的な施工となつて、合成樹脂膜が収縮して生じたものと考えられた(図—24)。

桃山時代障壁画彩色の剝離剝落は、その環境にもよるが彩色技法と切りはなす事が出来ない。しかし彩色技法については実はわからない所が多く、文献的にもあまり信頼すべきものがない。したがって剝離剝落の機構を分類する事は非常に難かしい事を改ためて感ずる事が出来た。画面に見る画法は単純だが、その深い所で画面を支える秘法や口伝がある事を考えないわけにはいかなかった。その様な画法を見出す事がこの調査の目的の一つでもあったのだが不可能な事であった。

我々が調査した襖絵、板絵は遺品のごく一部にすぎない。今後更に多くの遺品を実見し剝離剝落の機構を究明したいと考えている。尚、剝落止め処置に関しては、別稿「建造物等における合成樹脂処置一覧」を参照されたい。

注：保存科学7号 京都清水寺蔵末吉船絵馬の汚染調査と保存処置

Résumé

Toshikatsu NAKASATO : Present state of Screen and Panel Paintings in Kyoto

The author reports in this paper on the present state of Screen and panel paintings in Kyoto and the technique used for painting. The investigation was in 1971, 1972 and 1973.

i) In Tenkyū-in temple

The exfoliation prevention treatment was done in 1952 and 1972. The sliding screen paintings are now kept in satisfactory condition, showing no exfoliation. However, in the wooden panel paintings, some Chalk-painted peony flowers show marked separation at the areas with coarse wood grains and some ink paintings show whitening,

ii) In Nijō-jō castle

The condition for conserving the paintings are not good in general. There are also some problems concerning the conservation treatment already done. Although the treatment seems to have been done elaborately, there are some places where chalk layers are lustrous due presumably to the synthetic resin used for the treatment and the appearance of some parts of chalk-raised areas suggest that there may have been migration of pigment layers at the time of the treatment. The wooden panel paintings exhibit in part spalling by the size made of glue and alum, and especially the surfaces are covered with layers of blackish brown stains as if they were burned.

iii) In Chishaku-in temple

The paintings do not generally show significant exfoliation, although some exfoliated areas are seen on the trunks of trees painted with yellow ochre-type pigments. It is seen that the chalk-painted peony flowers are partly exfoliated in layers and, in some malachite-painted areas, the substrate paper is conspicuously broken. Some vermilion-painted areas show a network like cracks. Synthetic resin films are turning up in some chalk-raised parts.

As for the painting techniques, no gold foil is found under small areas such as cherry blossoms but deposits of gold foils are seen under some pretty large areas painted with ultramarine. Ivy leaves are stuck on the "painting of an old pine".

iv) In Nanzen-ji temple

All the sliding screen paintings have thin pigment layers and are generally in good condition. Damage of pigment layers, which is caused by abrasion rather than by exfoliation, is found. On a part of the "painting of a tiger" only the chalk-painted areas show some separation.

v) Nishihongan-ji temple

Jōdan-no-ma Room of the reception hall, the paintings are subjected to very severe damage, showing exfoliation in many parts. At present, network like cracks are seen in chalk and vermilion areas, and gold foils underlying the chalk layers are partly separated. There are some pigment layers in danger due to the peeling off

of the paper substrate itself.

Wooden panel paintings show various states of damage, such as one showing spoiling by the size all over its surface. Chalk-painted areas show marked exfoliation on wood grains and considerable exfoliation is seen at the surface layer of the malachite-painted areas. In one of the panel paintings facing outdoors, the panel surface itself has been subjected to weathering, but only the malachite-painted parts are not weathered. They show some separation.

vi) In Daikaku-ji temple

At the temple, the exfoliation treatment for the paintings was done in 1949. Up to this date, no conspicuous change in them has been noted in general. However, in the chalk-raised areas of peony flowers, there are many parts where substrate paper is exposed, which tells us that the paintings might have shown considerable exfoliation before treatment. In the "painting of willows and pines" the black wings of the cranes show severe exfoliation in parts and on the chalk-raised areas it appears that the resin film used for the treatment is separating. The wooden panel paintings, though showing some exfoliation, are well conserved at the present time.

vii) In Yōgen-in temple

The "painting of an elephant" on the screen on the east side of the main hall shows the spoiling by the size staining the chalk layers and a part of the pigment layers. The wave design and other pigments on wood grains are considered to be stabilized at the present time, although showing some exfoliation. The "painting of pines" gives us no problem. The paintings in the *botan-no-ma* (peony room) show some exfoliation in the chalk layer and other pigment because they are untreated.